

月報だより

月報だよりの原稿は毎月 20 日締切、翌月に発行の「天文月報」に掲載致します。校正をお願いしておりますので、締切日よりなるべく早めにお申し込み下さい。

e-mail で gjjimu@tenmon.or.jp 宛、なお、原稿も必ず 0422-31-5487 迄 Fax でお送り下さい。

人事公募

標準書式：なるべく、以下の項目にしたがってご投稿下さい。結果は必ずお知らせください。

1. 募集人員（ポスト・人数など）、
2. (1) 所属部門・所属講座、(2) 勤務地、
3. 専門分野、
4. 職務内容・担当科目、
5. (1) 着任時期、(2) 任期、
6. 応募資格、
7. 提出書類、
8. 応募締切・受付期間、
9. (1) 提出先、(2) 問合せ先、
10. 応募上の注意、
11. その他（待遇など）

理化学研究所平成 13 年度基礎科学特別研究員

3. 物理学、化学、生物科学、医科学、工学の各分野で、理化学研究所で実施可能な研究。
5. (1) 平成 13 (2001) 年 4 月 1 日
6. 平成 13 年 4 月 1 日現在 35 歳未満で、博士号取得者又はこれと同等の能力を有すると認められる者。
※日本国に永住権を有さない外国人にあっては、上記に加え次の条件を満たす者。①応募日現在日本国に在住している者。②日本国の大学院博士課程を修了（見込を含む）し、博士号を取得（見込を含む）の者。

●応募要項頒布：頒布開始は 4 月上旬予定。

応募要項の請求は、下記 FAX 又は E-mail へ①郵便番号②住所③氏名（漢字）④氏名（カタカナ）を記入し、送信すること。※要項代は無料

8. 平成 12 年 5 月 31 日(水)必着
9. (2) 〒 351-0198 埼玉県和光市広沢 2-1
理化学研究所 総務部
人事第 2 課 基礎科学特別研究員担当
TEL: 048-467-9268 (直通)
FAX: 048-463-3687
E-mail: wakate@postman.riken.go.jp

東京大学大学院理学系研究科
天文学教育研究センター教官

1. 助教授 1 名
2. 東京大学大学院理学系研究科天文学教育研究センター
3. 観測天文学。当センターは電波天文学、銀河天文学、恒星物理学の 3 部門および木曾観測所で構成されています。
4. 観測天文学
5. 決定後なるべく早い時期
6. 博士の学位あるいは同等の研究歴をもつ方
7. 履歴書、論文リスト、研究歴、研究計画
8. 平成 12 年 4 月 16 日 (LATEX File で E-mail 可)
9. 〒 181-8588 三鷹市大沢 2-21-1
東京大学大学院理学系研究科天文学教育研究センター
祖父江義明
sofue@mtk.ioa.s.u-tokyo.ac.jp

京都大学理学研究科物理学宇宙物理学専攻助手

1. 助手 1 名
2. 物理第二教室宇宙線研究室
3. 超高エネルギー γ 線天文学（実験）
当研究室では X 線と超高エネルギー γ 線（谷森教授が 2000 年 4 月 1 日より就任予定）を手段として高エネルギー宇宙物理の観測、実験的研究を目指しています。この分野の開拓に意欲的であれば、いままでの専門分野は問いません。
5. 決定後出来るだけ早く
7. 履歴書、研究歴、発表論文リスト、主要論文別冊、研究計画
8. 2000 年 5 月 9 日(月)
9. (1) 〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学研究科、物理第二教室
主任 九後太一
(2) 〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町
京都大学理学研究科、物理第二教室
宇宙線研究室、小山勝二
E-mail: koyama@cr.scphys.kyoto-u.ac.jp
TEL: 075-753-3833
FAX: 075-753-3799
10. 封筒に「教官応募書類」と朱書し、郵送の場合は書留のこと

人事公募結果

1. 掲載号
2. 結果（前所属）
3. 着任時期

国立天文台教官

1. 第92巻8号
2. 川邊（奥村）幸子
3. 2000年3月1日

研究助成

研究助成の審査結果

★平成11年度の東レ科学研究助成候補を日本天文学会から1件推薦致しました。その結果、東京大学大学院理学系研究科山本智様の「可搬型サブミリ波望遠鏡による中性炭素原子の銀河面サーベイ」、助成金額1,200万円が採択されました。

★平成11年度の日産学術研究助成候補を日本天文学会から2件推薦しましたが、不採択となりました。

研究会・集案案内

特別展「宇宙展2000」

～さあ始めよう時空の旅～

日時：2000年3月18日(土)～5月14日(日)
 〈休館日は毎週月曜日（3月20日を除く）、
 3月21日、4月21日〉

場所：名古屋市科学館
 名古屋市中区栄2-17-1

主催：名古屋市科学館、中日新聞社、中部日本放送
 入場料：一般1,100円、高大生700円、小中生400円
 趣旨：本展は、本格的な宇宙時代を迎える21世紀の到来を前に、人の手が届く地球近傍の宇宙から巨大望遠鏡でとらえることができるようになった遠くの宇宙までを紹介します。それにより、「私たちの宇宙とは何か」を考える機会を提供します。

主な展示：

○世界最大級の巨大いん石

中国しんきょうウイグル自治区ウルムチ市にある約30トンのしんきょういん石（学術名：Armanty いん石）を5000キロ離れた名古屋へ運んできます。日本にこれほど大きいいん石がやって来るのは初めてです。

○若田さんがキャッチ！宇宙から帰還したIRTS

1996年1月に日本人宇宙飛行士・若田光一さんがスペースシャトルで回収した人工衛星・SFUに積まれていた宇宙赤外線望遠鏡・IRTS（実物）を展示します。過酷な宇宙空間ではらかな宇宙を見つめてきたIRTS。この貴重な宇宙からの帰還者は、今、われわれに何を語るのでしょうか。

○科学館から宇宙の果てまで

名古屋市科学館から出発し、地球、太陽系、銀河を経て、最後は130億光年のかなたまで遠ざかりながら、私たちのいる世界を眺めてみましょう。

その他、レーザーやビデオ映像、スライドで送る宇宙大映像や、直径4mの巨大月面図、ビデオオンデマンドで見る宇宙開発の歴史、グッズショップなど宇宙や天文にかかわるさまざまな展示を予定しています。

連絡先：名古屋市科学館

電話：052-201-4486

<http://www.ncsm.city.nagoya.jp/2000/>

会務案内

日本天文学会早川幸男基金受給者募集要項

日本天文学会 早川幸男基金（若手海外学術研究援助基金）内規*に基づき、海外学術研究に対して援助を希望する者を募集（2000年度第3期）致します。

1. 援助金総額 年間200万円（2000年度）
2. 援助件数 年間数件程度
3. 募集対象期間 2000年7月1日～9月30日の間に日本を出発するもの。また前回の応募時に間に合わず、すでに渡航してしまった場合はその事情説明をつけて応募して下さい。
4. 応募必要書類（少なくともコピーの分はA4紙に統一すること）

原本1部、コピー5部。書類（特にコピーの分）に不備があると審査段階で不利益を被る恐れがありますのでご注意下さい。

- ①応募用カバーシート（第93巻4号237頁の応募用紙をA4に拡大コピーして使用する）。なお、

渡航目的と応募者の研究内容との関連は詳しく書くこと。

- ②論文リストを含む研究業績
 - ③観測については、観測割当通知および観測提案の写しか、それに準ずるもの
 - ④国際共同研究については、渡航先の招聘状および研究計画の概要
 - ⑤研究集会参加については、当該研究会開催の主旨を説明する資料、プログラム、および応募者の寄与（口頭発表等）を証明するもの
 - ⑥大学院生の場合、研究指導者の意見書
 - ⑦航空運賃の見積書
 - ⑧関連研究論文の写し（一編）
5. 応募締切：2000年6月10日必着

6. 決定時期：2000年6月下旬

7. 応募書類送付先：

〒181-8588 東京都三鷹市大沢2-21-1
国立天文台内
日本天文学会 早川基金募集係

*早川基金内規（天文月報第90巻第5号参照）による援助対象資格は「日本天文学会会員で、原則として35歳以下の天文学研究者であって、この基金以外の海外渡航費（滞在費を除く）の援助を受けない者。」です。

◎2000年はこの後、9月10日締め切りで2000年10～12月出発分の募集を行う予定です。応募希望者は書類等の準備をしてください。

◎援助者には、帰国報告書をお願いします。

星空市場

「歴史天文学」と「天文年代学」について

本誌の昨年4月号245頁のこの欄で、大橋由紀夫氏は「歴史天文学」などの用語について提案された。齊藤国治氏が研究を進めて、提唱されている「古天文学」という用語についての大橋氏のご指摘は、至極もったもなことに私は思う。文部省学術用語集・天文学編の増補版（丸善、1994）には、「古天文学」に対して「palaeoastronomy」という英語名をつけて掲載されているが、「palaeo-」は単に「古い」ということを意味する言葉であるから、齊藤氏が意図されている物には適当ではないだろう。もともと「古天文学」という言葉には、このような誤解を生む要因が含まれていると私は思う。

大橋氏が言われるように、歴史上の天文記録を天文学的に研究する学問分野は「歴史天文学」と呼ぶ

のがよいだろう。ところで、従来から「天文年代学（astronomical chronology）」という分野があって、私は「古天文学」よりは適切な言葉であると思っていたが、大橋氏はこれは「年代のはっきりしない天文記録の実年代を、天文計算によって確定するという分野に限定される。」（大橋氏の私信による）と考えておられるようである。明快なご判断であると思うが、「天文年代学」には天文計算によって実年代を確定することが出来ない問題を含めてもよいと思う。研究を進めても、今の我々の力では解決することが出来ない問題もあるかも知れないからである。従って大橋氏のいう「歴史天文学」が適するテーマもあろうし、また、昔からの「天文年代学」でよい問題もあるだろう。「古天文学」という誤解を生む言葉よりはよい。と私は思う。

長谷川一郎（大手前大学社会文化学部）